

キャリアヒストリー：わたしの場合 No. 5 〈学生指導を楽しむ「ベストティーチャー」として、診療科との兼任の道を2大学で拓いてきた医学教育者〉

I わたしの医学教育者としての特徴を、端的に表現すると？

- * 非医療系の大家族で医師を志し、診療科と医学教育のバランスに悩みつつも、両者を兼任する強みを発揮してきた医学教育実践者。
- * キャリアの大半を過ごした大学を離れ、新たな地に家族で引っ越し、新たなポジションで診療科と医学教育の新たな地平を目指そうとしている。

II わたしが、医学教育者として（／になるために）歩んできたキャリアとライフを一言でいうと…

- ①（大学入学以前）期 …A大学から20km圏内の片田舎で、非医療系の曾祖父、祖父母、父母、妹の7人家族に生まれる。近くの公立小中高校に進学後、父の勧めや家族の度重なる逝去の影響により医学部を志望、A大学医学部に推薦入試で合格する。大学では部活と飲み会に明け暮れ、よき友人を得て無事に卒業。
- ②（初期研修医）期 …2005年4月 A大学附属病院の初期研修医として入職。勉強不足を実感し、仕事をしながら必死に勉強し、臨床実習中の医学生にレクチャーや指導をすることが自分の勉強になり、学生にも喜ばれるなど、学生指導が楽しみの一つとなる。
- ③（後期研修医）期 …2007年4月 A大学外科系診療科の後期研修プログラムに入る。2010年4月、外科系診療科の専門医を取得。2010年4月～13年3月までチーフレジデント、フェロー、医員として大学病院で勤務。レジデントが選ぶベストティーチャー賞を2回受賞。2011年4月に新たに診療科の教授が着任、新体制となる。診療科教授に高難度手術と医学教育への志向を伝え、大学教員を勧められて大学院進学を決意。結婚し、第一子・第二子が誕生。
- ④（診療科教育担当 兼 病棟医長）期 …2012年に博士課程に進学し、基礎研究および臨床研究を学んだ。2015年には、大学スタッフ不足により急遽、学位審査を受け、大学院を早期卒業。2016年からA大学外科系診療科の講師として着任し、診療科の教育担当として学生や研修医の管理・運営・指導に携わった。2016年秋から2018年度の1年半は病棟医長も兼務し臨床医として研鑽。教育にも継続して携わり、ベストティーチャー賞は毎年複数学年から受賞。
- ⑤（医学教育学専任 兼 診療科医師）期 …2019年4月の医学教育学の前任者の退職に伴い、医学教育専任として診療科医師も兼務することになる。医学教育専門家講習の受講を開始、富士研ワークショップへ参加、現場で働く教員・指導医のための医学教育学プログラムを修了して医学教育の学びを深める。2022年に認定医学教育専門家を取得。2023年にはA大学医学教育学（寄付講座）の准教授に昇任した。
- ⑥（大学間異動）期 …准教授昇任と同時期、B大学の外科系診療科講座への新たな教授の就任を機に、診療科医師と医学教育学の兼任ポジションへの異動の誘いを受ける。A大学執行部等に半年以上かけて説明に回り、業務の引継ぎ後、2024年にB大学の診療科及び医学教育の兼任の病院講師として着任した。

Ⅲ 医学教育者としての、これまでのキャリアとライフの歩み

時期区分	ライフイベント等	特に取り組んだこと (課題・重点等)	達成・実現できたこと (業績・効果等)	困難さや苦勞したこと (問題・悩み等)	原動力や助けられたこと (動機・契機・環境等)
①大学入学以前 期	<ul style="list-style-type: none"> ・A大学 20km 圏内の片田舎で、非医療系の7人家族に生まれる。祖父と叔母夫婦は小中学校教員で、近くの公立小中高へ。 ・A大学医学部に推薦入学。 	<ul style="list-style-type: none"> ・推薦入試に合格 ・一足早く合格したため、高校の同級生の受験勉強を手伝う(問題集を作る、わからないところを解説等)。 	<ul style="list-style-type: none"> ・車を買ってくれるとの祖父の遺言を受け、推薦入試で合格。 ・A大学医学部では部活と飲み会に明け暮れ、よき友人と出会い、無事に卒業する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・医学部時代、進路は特に決めていなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・厳格な教育者の祖父の影響で、知的好奇心の重要性を知る。 ・美容師などサービス業に憧れたが、開業医生活を羨む父の勧めと曾祖父・祖父の死で医師を志す。
②初期研修医 期	<ul style="list-style-type: none"> ・A大学附属病院の初期研修医として入職。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学時代の勉強不足を実感し、仕事をしながら必死に勉強する。 			<ul style="list-style-type: none"> ・臨床実習生へのレクチャーや指導が自ら学ぶ機会となり学生にも喜ばれる→学生指導が楽しみに。
③後期研修医 期	<ul style="list-style-type: none"> ・A大学外科系診療科の後期研修。 ・診療科教授が着任し新体制に。 ・結婚。 ・第1子誕生。 ・大学院博士課程に進学。 ・第2子誕生。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学病院でチーフレジデント、フェロー、病院講師。 ・高難度手術と医学教育を得意分野にしたいと相談、診療科教授の勧めで大学院進学。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外科系診療科専門医を取得。 ・必修の診療科でないにもかかわらず、レジデントが選ぶベストティーチャー賞を2回受賞。 ・博士学位を取得 	<ul style="list-style-type: none"> ・2011年は「激動の1年」。 	<ul style="list-style-type: none"> ・大学病院勤務では若手が皆無に近いため、学生や初期研修医に雑務を依頼する中で指導力を磨く。 ・大学スタッフの人員不足から、原著論文2本で学位審査を受審。
④診療科教育担当 兼 病棟医長 期	<ul style="list-style-type: none"> ・自宅マンションを購入。 ・大学院博士課程を早期修了。 ・A大学外科系診療科講師に着任。 ・病棟医長兼務(1年半)。 ・前任者の退職に伴い、医学教育専任と診療科医師を兼務。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業・試験、臨床実習、初期研修医の指導管理、専門研修のサポート、自己研鑽。 ・全入院患者や手術の運営管理、後進の指導、自己研鑽。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の選ぶベストティーチャー賞を毎年複数学年から受賞。 	<ul style="list-style-type: none"> ・幸い家庭の不和は起きなかったが、自分自身はストレスによる身体的不調をたびたび起こす。 	
⑤医学教育学専任 兼 診療科医師 期	<ul style="list-style-type: none"> ・A大学医学教育学准教授に昇任。 ・異動の誘いで、B大学の診療科・医学教育の兼任病院講師に着任。 	<ul style="list-style-type: none"> ・手術・臨床研究、参加型臨床実習の環境整備(医学教育部門と各診療科の調整、FD実施、院外実習施設と交渉) 	<ul style="list-style-type: none"> ・富士研等への参加、現場で働く教員・指導医のための医学教育学プログラム修了に加え、認定医学教育専門家資格を取得。 	<ul style="list-style-type: none"> ・診療科業務と医学教育業務のバランス、ストレス解消の方法に悩む。 ・身体的不調は継続。 	<ul style="list-style-type: none"> ・診療科教授が医学教育の教授に自分を紹介した経緯から、ロビー活動の重要性を再確認。 ・家族の支えで安定した生活。
⑥大学間異動 期	<ul style="list-style-type: none"> ・家族4人で引っ越し(自宅マンションの売却・新たな購入) 	<ul style="list-style-type: none"> ・診療科医師・医学教育専門家として活動中。卒後教育。 		<ul style="list-style-type: none"> ・両親と祖母は寂しかったが「いつでもつながれる時代」 	<ul style="list-style-type: none"> ・成長の停滞感、自分を必要とするポジション、家族での転居。

IV. 抱負

教育は楽しいものであり有意義なものである、という信念のもと、医学教育の理論的に作られたシステムや体制、教育法などを、どうやったら現場で実施できるかのレベルに落とし込み、多くの教員や学生へ届けることが、より良い教育を実現するために必要なことだと考えている。そして、1人の医師としても常に挑戦し続け、新たな学びを得、最高の医療を提供すると同時に、医療者に還元できる教育者になることが理想である。現在は、診療科の医師としてロボット支援手術を含めた高難度の手術の研鑽や、研究や専攻医の教育に携わるなど、大学教員としての研鑽を積んでいると同時に、医学教育専門家として自身の学びを深めながら医学教育者の養成に関する学内外の活動を行っている。最近では、「医療の充実・発展に寄与する人材の育成」が自分の使命とを感じるようになってきた。一方で、今はどちらに注力すべきなのか、自分に求められることは何なのか、どんなキャリアを歩んで終着地点に辿り着くのか、など、今後についてどうなるかを思い悩むことがさらに増えてきた。これまでは、自分のやりたいことや得意なことを続けながら、様々な良い出会いによって刺激を受け、他者への貢献に楽しみを感じながら仕事をしてきた。今後どうなるかはわからないが、偶然の素晴らしい出会いや思いがけないチャンスが来たときに掴めるように準備しながら、誰かの役に立てる目の前の仕事に日々真摯に取り組んでいきたい。

V. 次世代や悩めるあなたへのメッセージ

私は、臨床医をしながら教育に携わるようになったことをきっかけに医学教育の存在を知り、気が付いたら医学教育者の道に足を踏み入れてしまっていた。医師になる過程で医学教育を学ぶ機会はなかったため、医師になってからの手習いとして、医学教育の集中講座やプログラム、学会等で系統的に学び始めた。最近では、医学教育の奥深さを知り、医学教育研究の難しさを知り、道の険しさに少し途方に暮れている節もあるが、教育された側の若手医師の成長や、教育に関わることを通じた自分自身の成長も実感しており、教育を通じて医療の普及や発展に寄与できるのも悪くないと感じている。

医学教育は、社会に必要とされる優れた医師の養成ということだけでなく、医療技術を後世に伝え、さらに発展させていくという観点においても、臨床、研究、と等しく重要なものである。大多数の医師は後進の教育に興味や関心はあるものの、その重要性を過小評価したり、他人まかせにしたり、多忙を理由にやっつけ仕事としたりと、教育は業務の片手間になされていることがある。一人でも多くの医師が教育の重要性を知り、自身の知識や技術を伝え、よりよい後進を育てていくことこそ、医療の発展があるのではないだろうか。医師はどのような形であっても教育に携わっていくことは大きな価値があることだと信じている。一人でも多くの医師が、それぞれのやり方で医学教育に関わり、これからますます医療の発展に貢献していただければ幸いである。